

アートの島で出会う人と暮らし、  
そして人生を見つめなおす

一昨年の地中美術館オープン以降、以前にまして美術館ファンで賑わっている直島。島外から降り込んでカフェを開いたり、空いている部屋を安い民宿にしたり、島に暮らす人々のあいだにも新しい風が吹き始めている。美術館を訪れたら、そんな島のリアルにも触れてみたい。



正直言って、ベネッセアートサイト上のホテルに泊まるのは経済的にツライ。もちろん宿泊施設としての満足度は高いのだけれど」といって、これまで島には手ごろな宿泊施設も、お茶を飲んだり食事を楽しめるレストランもなかった。婦りのフェリーの時間を気にしつつ、駅け尾に地中美術館と、点在するインスタイル・シヨウワーク群（「家プロジェクト」）を見て日帰り、という読者も少なからずいたのではないだろうか。作品を取り巻く島の風土や文化についても、ほんとうはとも興味があるのに、なかなかゆったりと味わえない。そのあたりを今回の旅では体験してみたい。そう思っただけで、久しぶりに直島を訪れた。今年、本村がとんとん変化している

焼板と呼ばれる焼いた杉板の壁に、重厚な瓦葺屋根を載せた伝統的な家々が軒を連ねる「本村地区」。ベネッセアートサイトによる空き家でのインスタイル・シヨウワーク「家プロジェクト」が点在するこのエリア

で、にわかに建設ラッシュが起きている。本村港近くにある「石井商店」。結婚を機に直島に暮らし始めて30年になる石井竹男は、築110年以上の店舗兼住居として使っていた母屋を改修していると



■夕日に染える車窓風景の《南風》。右手には5月にオープンしたばかりのベネッセハウス創設記念「Beach」「Park」が有りきともじはじめていた。アートの島、直島はいつもいろんな美術を見せてくれる

■地中美術館のウィルター・デ・マリア《タイム/タイム/タイム/ノータイム》(2004) 撮影=船江孝典

ころだった。宿泊まりもできる民宿と宿泊客向けの飲食店として、この夏にオープンする。

立石千鶴は去年12月、自宅の離れを民宿にした。宿の名前は「おやじの海」。取材当日、東京から来た女子大生が2段ベッドに宿泊していた。「昨晚は、獲れたてのメバルをいただいたんです」。

今年4月にオープンした「玄米心食あいすなお」は、赤松汐里が自ら手を加えて廃屋を改装した食堂。昨年の台風による洪水の痕が柱に残っている。直島の伝統食をヒントに、玄米や大豆を使った自然食を提供する。

### 首都圏から身ひとつで移住したカフェオーナー

これまでも、島の人びとに、家プロジェクトの作は品解説ボランティアなどアート活動に関わろうとする姿勢はあった。しかし店を出すといった、より積極的なサービスへと意進を変えた背景には、カフェ「まるや」の存在が大きい。家プロジェクトの作品、宮島達男(角屋)

と内藤礼(きんぎょ)の中間に位置する「まるや」。店を切り盛りする大塚ルリ子は、2年前に埼玉から直島に移り住んだ。「たんなる美術ファン」として、2002年の正月に初めての直島へ来ました。当時、善段は雑貨を扱うメーカーでデザインナーとして働き、週末に既覧会を見て回るという生活をしていました。まとまって休みが取れる時期は限られていたのです。

翌03年の正月に再訪。すごく楽しんでしまい、つい餅りのバスを逃してしまいました。バスを待つ1時間の間、「なにをしよう、お茶をするところもない」と思い、寒かったので自動販売機で缶コーヒーを買いました。それがスルかった。ショックを受けたと同時に、私のなかに「ここにカフェをつくらう」とスイッチが入ったのです。

偶然かもしれないが、同時期に会社で部署異動の話があり、大塚は退社を決定する。そして、まずはベネッセアートサイトを運営しているベネッセコーポレーションに「本村地区にカフェをつくりたい」



という内容の手紙を出した。好意的な返事もらい、地元の世界に詳しいひとりの男性を紹介してもらった。その人づてで、現在「まるや」の大家となっている人がカフェをつくらうとしている、という連絡を受けた。直島へ再び出向き、スベースを紹介してもらい、夢を説得し……とん拍子に大塚の夢は現実となっていく。04年3月30日、カフェオープン。人の輪、なごみの和、美の原点である丸の形……いろんな意味をもたせ、「まるや」と名付けた。

### 島の近代史とアートの土壌

直島町役場は大正時代、銅や金の精錬を行う企業、三菱マテリアルの工場誘致に成功する。軍需景気が工場は活気づき、また関連企業が増えて、島の北側には多く働き、生活している。大企業のもたらす富によって、瀬戸内のほかの島に比べ生活は飛躍的に豊かになり、他地域から移住してきた人たちも多かった。大塚の移住がごく



■富之浦港から内側へ左岸に渡ると、やがて雙柳と柱小姓宅跡が垣れる。築60年になるという三菱マテリアルの社員住宅だ。しかし、取り壊しが決定。この号が出ている時にはもう見られないかもしれない。富之浦港からすぐの松葉「FREN(富之浦)」の跡に、戦時中の防空壕が残っていた。工場があったこの島も、空襲の標的になったのだから。FRENと関連して、直島を舞台に描かれた小説をテーマにした『007(赤い刺青の男)記念館』が公開されている。

■三菱マテリアル直島精錬所。真西には、2004年にあった山火事の焼けあとがまた生々しく残っている。





139 ヤン・ファン・オープンさせた。また、

2000 岡山市に本社のある福武書店  
「僕もマッセル」だの「レシ」が「美  
術」を持ち込んだのは1989年。  
入り江を囲む一角に「直島国際キ

ホテルとミュージアムが一体とな  
ったベネッセアートハウスを建築  
家・安藤忠雄に設計依頼して建て、  
館内にコンテンポラリーアートの  
コレクションを展示したり、屋外  
にサイトスペシフィックな作品設置  
を行う。97年からは、本村地区の  
いくつかの空き家を使って「家プロ  
ジェクト」が相次ぎ設置され、また  
2001年には島の家や店舗、診療  
所といった建物を使った  
「STANDARD」展を開催するまで、  
徐々に島の生活基盤へ、その活動  
を浸透させてきた。当然、はじめ  
から島の人びとに美術への理解が  
あったわけではないが、いまでは  
「島の美術関係者」も「島には作家  
や作品が身近にあるせい」かた  
えば「離れたガラスを見て、「アート  
じゃ」と思っている」ともあれば、

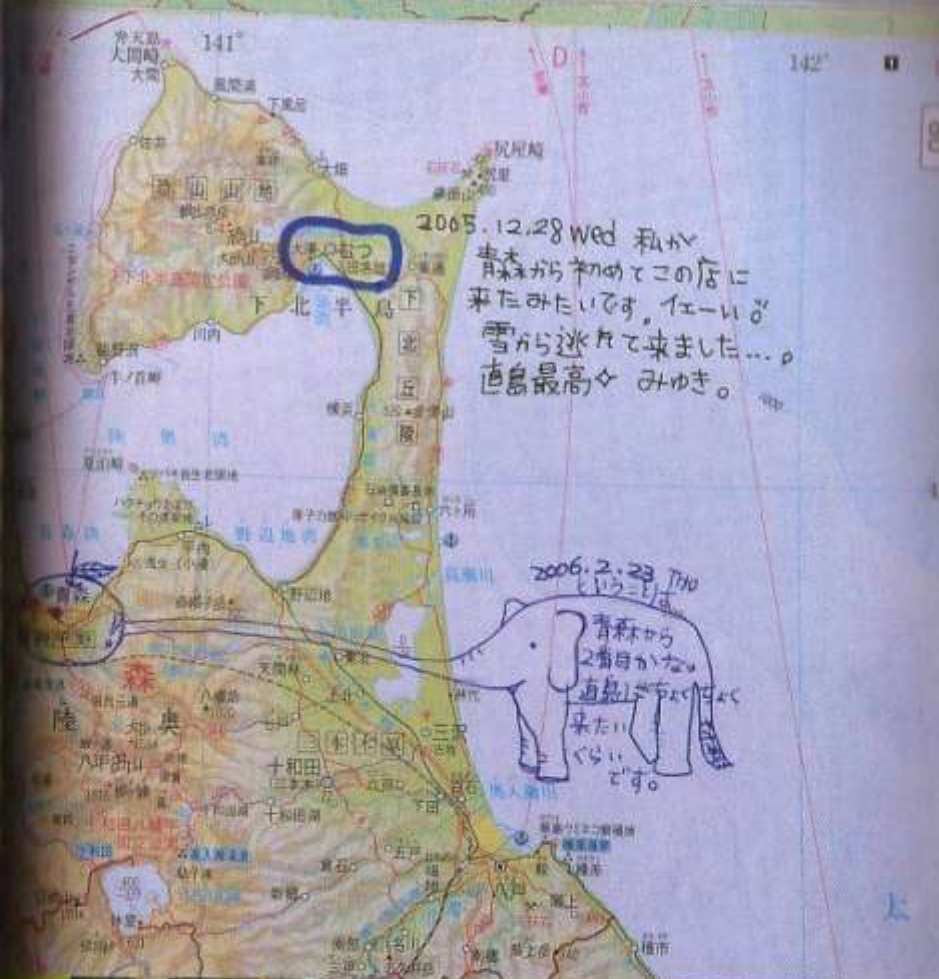
8

140 自然に受け入れられたのも、そん  
な環境のせいかもしれない。いっぽ  
う、戦後高度成長期を過ぎた頃、  
全国的に産業公害が取りざたされ  
始める。銅精錬時に出る亜硫酸  
ガスにより破壊された自然への意  
識が高まる。近年は、陸の豊島に  
不法投棄された産業廃棄物を、直  
島で処理する「エコアイランドお  
しまプラン」として活動を始める。処  
理段階で出た銅や金が新しい資源  
として活用されようとしており、  
三菱マテリアル直島精錬所による  
「PLANETツアール」に参加すると  
その光景を体験できるはずだ。

2000 岡山市に本社のある福武書店  
「僕もマッセル」だの「レシ」が「美  
術」を持ち込んだのは1989年。  
入り江を囲む一角に「直島国際キ

140

ホテルとミュージアムが一体とな  
ったベネッセアートハウスを建築  
家・安藤忠雄に設計依頼して建て、  
館内にコンテンポラリーアートの  
コレクションを展示したり、屋外  
にサイトスペシフィックな作品設置  
を行う。97年からは、本村地区の  
いくつかの空き家を使って「家プロ  
ジェクト」が相次ぎ設置され、また  
2001年には島の家や店舗、診療  
所といった建物を使った  
「STANDARD」展を開催するまで、  
徐々に島の生活基盤へ、その活動  
を浸透させてきた。当然、はじめ  
から島の人びとに美術への理解が  
あったわけではないが、いまでは  
「島の美術関係者」も「島には作家  
や作品が身近にあるせい」かた  
えば「離れたガラスを見て、「アート  
じゃ」と思っている」ともあれば、



■カフェ「まるや」の本館には、旅館として使われている3年目回とともに、中学校会科で使われる地図帳がある。世界中から直島に訪れる人たちが、メッセージを書き込む。グローバルなコミュニティが、ここからつながっている  
■古い家が残る本村地区では、「家プロジェクト」が進行中。大竹伸朗、須田悦弘らの作品が今秋公開予定  
■まるやを運営する大塚ルリ子さん。「作家の皆さん、まるやに置いて私が宣伝をしますので、全国のフライヤーを送ってください! (送り先は香川県豊田郡直島町本村777「まるや」宛! )  
■まるやは築30年の民家を改修したスペースを活用している。ちゃみ台で談笑するもよし、ソファで静かに読書するもよし



この秋には再び「STANDARD」

展が開催される。企画に携わる直島福武美術館財団の館田佳世子芸謀長によると、「ジャズで「スタンダードナンバー」と言いますが、そのスタンダードです。定番ということ。直島に深い理解を示すアーティストたちが、島内さまざまな場所ですべて「家プロジェクト」大竹伸朗、千住



## 見る



### 地中美術館

2004年開館。院長は社団法人、館長は安藤忠雄。地中の名の通り、階段を下りて地階の中に入って行く美術館。クロード・モネ、ウォルター・デ・マリア、ジェームズ・タレルの作品が展示される。

**住所** 香川県高松市3449-1

**開催** 3月1日~8月30日 / 10:00~18:00 (入館は17:00まで)、10月1日~2月末日 / 10:00~17:00 (入館は16:00まで)

**休館日** 毎週月曜日および12月30日~1月2日(ただし、祝日の場合を除く)、翌日休館。4月29日~5月5日、8月13日~8月15日は閉館。

**料金** 一般2,000円

**問い合わせ** 087-892-3755

<http://www.chichu.jp/>

## STANDARD

2001年に行われた「STANDARD」展に引き続き、今年秋に第二弾を開催。「日常を支える生活解読を「文化」の視点から見直し、芸術活動によって再構築していく」とをコンセプトに、早稲田進、川原正、小沢剛、大竹伸樹、杉本博樹、渡辺裕也、千住博らが参加。

**開催** 10月7日~12月24日、2007年2月24日~4月15日

**問合せ** 087-892-2687 (ベネッセアートサイト直島 本村ラウンジ/アーカイブ NAOSHIIMA STANDARD2事務局)

<http://www.naoishiima.co.jp/standard2006.html>



### 香川県歴史博物館

歴史や平家源内らを生んだ香川1000年。地元・厚敷などで織り上げられた瀬平合巻、瀬戸内海を使った塩産物など、歴史とともに語られた資料を展示。

**住所** 香川県高松市玉城15番5号

**開催** (常設展示) / 一般400円 / 高校生300円 / 小中学生100円

<http://www.pref.kogawa.jp/kekkaku/>

## 泊まる



### ベネッセハウス

ベネッセアートサイト直島の中秋館。本館「ミュージアム」棟は安藤忠雄の建築に多くのアーティストの作品が「ここでしか見られない」かたちで展示されている。宿泊もでき、そうした作品に夜も会えるのは、宿泊客だけのひそかな楽しみだ。ほかに宿泊棟の別館「オーナブル」、今年5月には、新館「パーク」「ビーチ」が営業を開始。49の客室をもつ、安藤忠雄の水造建築でレストランやスパも併設された。

**住所** 香川県高松市高松琴平地

**宿泊料金** 800~2100 (入場は20:00まで)

**休館日** なし

**料金** 朝食=大人1000円、3才以上小学生以下500円

宿泊=2770円~(ただし7/20~8/31とゴールデンウィーク、観戦前日のハイシーズンは別)

**問合せ** 087-892-2030

<http://www.benesse-hs.co.jp/>

## 寄り道



### umie

文字通り海を臨む場所に立つ、築70年の倉庫の一角にあるカフェ。洋食、洋酒などの本が充実。フェリーを待つしばらくの間、ゆっくりとした時間を過ごせる。エスプレッソ400円、カレープレート200円などメニューも充実。

**住所** 香川県高松市北浜町3-2 北浜sky内

**問合せ** 087-811-7455

## 泊まる



### 民宿おやしの海

離れをリフォームして、昨年12月から民宿として営業開始した。和室中心で、一泊(夕・朝食付き)5500円~、春泊より3700円~。自然も堪能。夕食には焼けたての魚が待っている

**住所** 香川県高松市高松0772

**問合せ** 087-892-2209

[http://mypage.odn.ne.jp/home/stone\\_cosan/](http://mypage.odn.ne.jp/home/stone_cosan/)

## 食べる



### カフェまるや

空間が入った名物の「まるやのカレー」600円のほか、ケーキ、わらびもちなどスイーツも充実。ランチタイムは頂くるので、ちょっと時間をずらしてまったりと過ごすのがオススメ。

朝陽会「読書まるや」K&Iと7人のサムライ(朝)が6月1日~31日に開催。朝くべ(バリエーション/カフェ)もつく(ハードタッチなペン)をもつ小学生アーティストK&I。大好きな時代劇、宝飾物をテーマにした7人のアーティストと「ウル」

**住所** 香川県高松市本村777

**問合せ** 087-892-2714

<http://cafe-maruya.jp/>



### 五米心食「あいすなお」

直島の伝統食「こじる」をモチーフにした大豆スープも付いた「あいすなおセット」800円。同じく伝統食「すずりこ」(ごま油煎ったのりかきそうめん)500円。

**住所** 香川県高松市東町4番16-1

**問合せ** 087-892-3630



1 石井商店で立ち話していたら、通りがかりの老人が自宅に案内してくれた。慶應義塾大国際研究センターの院長が中心となりノベリオンした民家だそうだが、驚くと、ここには老人の娘さんがお住まいとのこと。築、母屋を葺いたモダンな住居空間だった

2 藤本心食「あいすなお」の新緑夕景さん。スローライフを求めて各地を旅し、直島にたどり着いた

3 カフェ「まるや」で出会った人たちと話していた今井あづきさんは、この前日に東京から来た大学生。立石さんとは、もうメル友になっていた

4 観光ボランティアの横谷明子さん。北前船を想いだした母家ゆかりの品々を自宅で公開している



博、須田悦弘による、本村地区での家プロジェクトが、展覧会時期に合わせて同時公開される予定だそう。上原三千代の彫刻作品、デイヴィッド・シルヴィアンのサウンド・インスタレーション、SANKU設計による宮之浦港の新フェリーターミナル(海への駅)で展開される三宅信太郎の着ぐるみドロリーイング・パフォーミング・ダンスも楽しみだ。SANKUはフェリーターミナルのほか、本村地区に突如出現するオアシス空間も手がけている。いっぽう、同財団は今年からなんと「米づくりに」を始めている。秋にはその反転

を祝って、島の伝統的な秋祭り「STANDARD」展とのコラボレーションも予定されている。普段の生活のような、時間に追われることをしないことが旅行の醍醐味なら、船が出るまでのわずかな時間を使って島を探索することをオススメしたい。「直島に住んで、まるで私と同じような美術ファンの人たちが学生との出会いが提供できることは楽しいです」(大塚)というように、直島というアーティストの島がもたらしてくれる、新しい出会いや発見がきっかけとなるはずだ。(文中敬称略)